

パラオ共和国ペリリュー島訪問

塞がれたままの防空壕

当会会員でパラオ共和国に会社を持つ西島淑子さんから、パラオ共和国ペリリュー島に多くの遺骨や遺品が放置されているとの情報を得たので2004年1月にペリリュー島を訪問した。

パラオ共和国は第二次世界大戦前、日本が統治しており、当時多くの日本人が住んでいた国である。

ペリリュー島は約30平方キロの小さな島だが、第二次世界大戦中、旧日本軍約1万人が玉砕した島だ。

この島で旧日本軍は、500ヶ所とも言われている防空壕を掘り米軍と約70日に渡って戦い玉砕した。

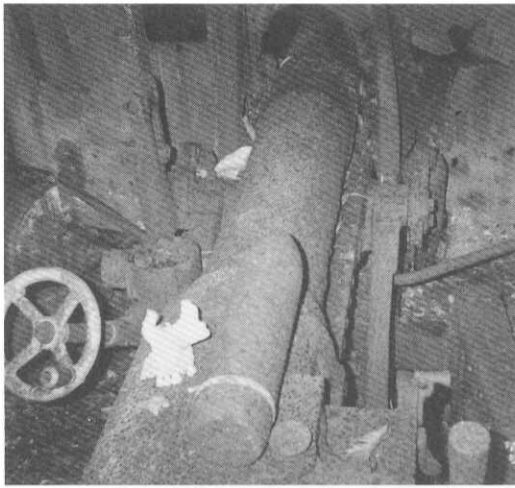
その防空壕は、ほとんどが空けられないまま戦後60年放置してあった。旧日本軍の生還者や現地ガイドの話では防空壕内には多くの遺骨が放置してあると言う。ペリリュー州知事ジャクソン氏の説明によると、日本政府には協力する用意がある旨の文書を送っているが回答が無いとの事であった。

このようなことはフィリピンの日本大使館でもあった。多くの国民はこのような怠慢な日本政府の実態を知らされていない。

当会はペリリュー島の遺骨収集を厚生労働省に強く求める。



ペリリュー島に放置された旧日本軍の不発弾



防空壕の前には高射砲が放置

30万発の不発弾放置

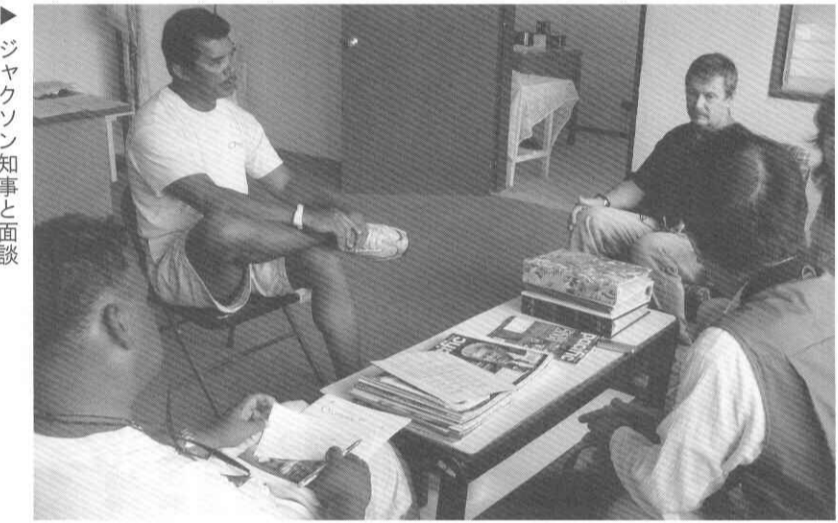
防空壕の付近には多くの不発弾が放置してあった。慰霊巡拝に訪れる日本人が建立したであろうと思われる慰霊碑前には不発弾が無造作に並べてあった。

現地ガイドの話では30万発の不発弾が放置されているという。

沖縄県で遺骨収集中、不発弾の自然発火の経験を持つ私は身の毛のよだつ思いがした。

戦後60年経ったとはいえ、訪れる日本人も多いこの島の不発弾は誰が処理しなければならぬのか。

一応厚生労働省には処理の申し入れをしているが。



ジャクソン知事と面談

残留日本人孤児と面談



ホセイ・キミコさん

ジャクソン知事との面談の中で、ペリリュー島に残留日本人孤児ホセイ・キミコさんがおられることを知らされた。

早速面談し、事情を聞いてみた。キミコさんは1944年7月日本人の両親に生まれ、戦時中日本人の両親はキミコさんを育てる親に預け日本に帰った。

戦後生みの親はキミコさんを引き取りにきたが、育ての親に断られ泣く泣く日本に帰った。自分が日本人だと知らされたのは、自分が産まれた時で両親は知らせた人をものすくすく怒った。

両親は亡くなる前にお前の両親は日本人で北海道の出身だと言った。

キミコさんは両親がいるであろう、日本に住みたいと言う。

当会では副理事長が北海道に赴き北海道庁で呼びかけを行ったが、現在まで手がかりはつかめていない。

もしも当会の方がおられたら、当会までご連絡をお願いします。

遺骨10体遺品数十点

空けられたいくつかの防空壕で遺骨探しを行い、十体の遺骨を発見した。しかしパラオ共和国の方針で持ち帰ることは断られた。

また戦没者の遺留品を展示しているというミュージアムに案内して頂いた。ミュージアムは空調設備も無く紙の部分はボロボロになっていた。戦没者の遺族にとっては宝物だと思いい持ち帰りたい。

とりあえず、氏名の判別できる遺留品のリストを掲載しているので心当たりの方は申し出て頂きたい。

厚生労働省三月に現地調査

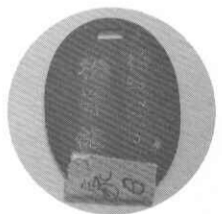
今回の私どもの調査報告を受け、厚生労働省も三月に調査団を送ることになった。

アメリカより遺留品返還の申し出

～情報をお待ちしております～
NPO法人戦没者を慰霊し平和を守る会
TEL 0942-89-5135 担当 田中、古賀
〒849-0112
佐賀県三養基郡北茂安町江口7561

「新たな遺留品発見」

沖縄県真栄里病院壕



松寄鎮さんの認識票

国吉勇さんが45年間遺品は10万点を超える、その中からでさえ名前が判明した遺留品を探すのは大変な仕事だ。何回も見直したつもりでも見落としがある、2月に訪沖した折遺留品の中から、松寄さんの認識票を見つけた。裏側には平成6年真栄里病院壕とあった。

早速、調査したところ松寄鎮さんは長野県出身であることが判明した。

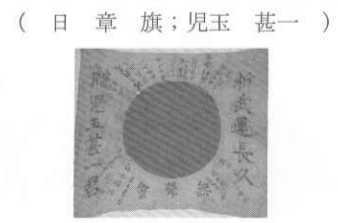
遺族に返還したい

「無声会」について知っているなどの情報をお待ちしております。

アメリカニューヨーク州在住の Shannon さんが当会の Website に返還依頼をしてきたのは、平成15年11月21日のことです。当会は、持ち主が「児玉甚一」(Shannonさんのお父様が戦争でフィリピンに行っていたこと2点を手がかりに厚生労働省に照会依頼をしました。その結果、「軍歴簿に該当者が一名おり、遺族を調査したが、全ての関係者遺族が亡くなられており判明に至らない」と、また、「該当者の「児玉甚一」と日章旗の「児玉甚一」が同一人物と確認できない以上、出身県は教えられない」との回答でした。このことを Shannon さんに報告したところ、当会も Shannon さんも「遺族を探手段がある限りあきらめない」という結論に至りました。そこで、今回の会報に Shannon さんより依頼されている「日章旗」とコメントをご紹介します。



(Shannonさんと娘のSarahさん)



(日章旗; 児玉 甚一)

(写真提供 “Harry Scull / The Buffalo News”)

<コメント>

Shannon : We began this project to honor the memory of our father, Arthur J. Pim. He never Spoke of the war before he passed away almost 30 years ago. My mother and I felt Sure he would have wanted this attempt at reconciliation on his behalf. Hopefully, returning this piece of history to the family members of Jinichi Komada will bring a measure of comfort and peace to everyone concerned.

訳： 私たち家族は、私の父 アーサー・ジェイ・ピムの思い出を尊重するために、このプロジェクトを始めました。父は亡くなるまでおよそ30年、戦争のことを決して話しませんでした。きっと父は、父の代わりに和解する努力をして欲しかったのだと、母と私は感じています。この歴史の一端を児玉甚一さんのご家族にお返しすることが、当事者とかかわりのある方々に平和と慰めをもたらすことになる事を願っています。

長野県出身 松寄さん

現物は国吉勇さんの戦争資料館にございますが、国吉さんは真栄里病院壕が松寄さんの亡くなられた場所であろうから肉親をご案内したいと言っている。

心当たりの方がおられれば当会までご連絡頂きたい。